

庭からの旅

庭への旅

水の庭 —— 東西の水の庭を訪ねて

水の記憶

人が水の音にやすらぎを覚えるのはなぜでしょうか。小川のせせらぎや波の音が何ともいえない涼感をさそうのは、それが谷間をわたる微風や海風を連想させるからだけではなくて、水そのもののもつもっと根源的な性質によるのかもしれませんが。

人が生まれる以前に、意識も生まれぬままに聞く初めての音が、水の音、すなわち子宮の中の羊水の音なのです。我々はみな、そもそものはじめから水をなかだちとして世界とつながりをもってきた、そんな記憶が水音によってかすかに呼びさまされているのかもしれませんが。

さて、庭にせせらぎの音をもちこむことは、日本では歴史に残る最古の時代から行われてきたようです。この六月に、奈良県の明日香村で、流水のしかけのある池をもった大規模な庭園の跡が発掘されました。ここは明治時代にも「出水の酒船石」とよばれる石の笕が出土したところで、ちょうど向かいの小高い山の上に、観光名所でもある「酒船石」という永らく用途が謎とされてきた石造物を仰ぎ見られる場所にあります。「出水の酒船石」のほうは京都の屋敷持ちの家に庭石として売られてしまい、今ではそこにありませんが、これでどうやら酒船石がなぜ庭園遺構らしきものでありながら人里離れた山の上にぽつりと残されてきたのか、やっとわかってきたようです。

発見された庭は、まん中に島を浮かべた池の庭で、おそらく船遊びや曲水の宴といった中国風の遊興が行われたことでしょう。そのような水遊びは、中国の風をまねるといふ文化的な威信を示す役割にくわえて、水を自在に操る技術として、人心をつかむにじゅうぶんな驚きをもって迎えられたようです。この庭のみならず、周囲には自邸の庭に島のある池があったことから「島の大匠」とよばれた蘇我馬子の屋敷跡や、漏刻と呼ばれる水時計の発見された水落遺跡など、水の仕掛けにかかわる遺跡が数多くあり、おそらく一帯は古代のウォーター・ガーデンの観を呈していたに違いありません。

水を操るといえば、まず普通に思い浮かべるのは治水事業でしょう。洪水を防ぎ、灌漑によって田畑を拓く、教科書的にとらえればこれこそ国家事業に相違ありません。しかし実際上の事業以前に、放っておけば低い方へしか流れぬ水はある時は上方へ跳ね上げ、ある時は一堂に集めては水音をたてて落とす、そんな余人にはなしえぬ技を目に見える形で示すことこそ、当時の為政者にとっては自らの支配力を誇示する最大の舞台であったのです。彼らにとって水の庭は、安らぎの庭であると同時に、その安らぎをもたらすテクノロジーの開示の場でもあったのでした。

もちろん、すべての水の庭がそのような権力の磁場であったわけではありません。飛鳥時代以前から、水音はもっと人間の手の届かぬ、信仰の対象としてとらえられてきました。明日香村から吉野をぬけてさらに山を分け入った熊野には、日本の信仰の原点ともいわれている瀧を祀った社、熊野那智大社があります。熊野といえば「日本の原郷」とまでいわれる絶景の地、五月にここを訪れば新芽の萌えてた木々の上に、藤の花が薄紫の烟をたなびかせ、岩の上には山石楠花がうすく紅をひいた白い花をつつましく覗かせていて、まさに花盛りの庭の趣です。そんな中でこの那智の瀧の音を耳にすると、幾重にも畳みこまれた熊野の山々のエネルギーが一手に集まって発する一瞬の音が、重々しく響いてきます。轟音とともに瀧壺におちた水は、何度も周囲の石

に跳ねかえって砕け、重力に支えられなくなると霧になって辺りを包みこんでいきます。那智の瀧の水音からは、羊水の音という我々の誕生に関わる物語よりもさらに古く、我々人間も、あるいは生命すら誕生する前の遙かな響きが聞いてとれる、そんな気がしてきます。

無隣庵の庭

我が家に庭をもちたいと願う人にとって、小さいながらも緑にあふれ、しかもあまり暗くならない適度な開放感は、つくろうとする庭のスタイルにかかわらず共通の条件になっているようです。そこにさらさらと流れる水の音が加われば、暑い夏を涼しく過ごすのに、これほど格好の場はありません。水の流れは風を呼び、鳥や、虫たちにも涼みの場を与えてくれます。

京都の東山、南禅寺の近くにある「無隣庵」という庭は、そんな現代的な庭の条件をほとんど満たしてくれる数少ない庭のひとつです。明治維新の元勳であり、帝国陸軍の創設者でもある山縣有朋が、小川治兵衛＝通称「植治」という明治のガーデン・デザイナーと共同で作りあげた庭で、東山の緑を背景に、こじんまりと、しかし深山の趣ももった安らぎの庭です。

主屋や茶室の前からは、底の石組みまで見えるほどのごく浅い水面が広がり、奥の木立ちの上に東山の連峰が見渡せます。この池には、庭の奥からゆるやかな流れが導かれており、その源は最奥部の木立の中に組まれた滝にあります。琵琶湖から南禅寺の傍らへ、京都の町の上水道として引かれてきた琵琶湖疏水からとられた水がこの滝を潤し、池へ流れこみ、そして茶室の横から再び疏水へと戻っていきます。

開け放たれた建物の中から、煎茶を啜りながらこの庭を眺めていると、この小さな空間の中には無限の空間が折りこまれているような気がしてきます。奥にある滝が深山にある水源であるとすれば、目の前に広がる池は、すでに海のように広く穏やかであるからでしょう。伝統的な日本庭園だからといって、見る者に解釈をせまるようなかしこまった精神性も感じられず、流れの周りに広がる芝生には時々小鳥が舞い降りて、西洋の庭園を思わせます。ここはまぎれもなく維新以後の、文明開化の庭なのです。

このあっさりとした、むしろ単純な水の流れは、かえって我々に水の本質を見せてくれているようです。一時たりとも同じ様相をみせることのない流れと、深山から発して再び深山へと還っていく大きな円環とが、水のもう一つの顔をあらわしている。無隣庵の庭は、その大きな円環を一ヶ所に凝縮することで我々を魅きつけ、軽やかに流れ去らせることで我々を開放してくれるのです。

ヨーロッパの水の仕掛け

水のもつ性質をそのまま庭に持ち込むという日本の水の庭のやり方は、「自然をねじふせよ」という共通のテーマで水力工学を発達させたヨーロッパの方法とは対極にあるようです。ヨーロッパにおいては、水は仕掛けによって自在に操られ、楽しみのために供されてきました。特に十六世紀のイタリアでは、水はまるで彫刻のように扱われていたのです。

フォンタニエリ（泉水技師）は「まるで彫刻師が粘土をあつかうように水をあつかい、水にさまざまな形を与えた。細く高く噴き上げる水、透明な幕となる水、勢いよく落下する水が張り合い、競い合う。オーヴァル池の中央で噴水がエステの紋章の百合の花の形に噴き上げていて、池のまわりに置いたテラコッタ——粘土の素焼——の百合の花や鷲の彫刻と美を

競い合っていた」。

(愛と支配の博物誌 イーファー・トゥアン著 片岡しのぶ・金利光訳 工作舎)

これは大規模な噴水の庭として有名なティヴォリのエステ荘の描写ですが、水に形を与えようとする執拗なまでのこの姿勢は、水がいかにも思いのままにならないものであるかを、逆に照らしだしているようでもあります。エステ荘には、他にも階段状に斜面を流れ落ちるカスケード、たくさんの乳房から水を噴き出す地母神像、ニンフィームと呼ばれるニンフ（水の精）を祀る洞窟の噴水、今ではこわれてしまって音はならないものの、かつては水の力で音を奏でたという水力オルガンなど、まさに水の百態（巖谷国土）というべき水の仕掛けがそろっています。

その中には、こんなにいたずらっぽく、少し小粋な仕掛けもありました。再び先程引用した「愛と支配の博物誌」の一節です。

この庭園の一角に入っていくと、「小鳥のさえずりが聞こえてくる」。水が落下して特定の場所の空気に衝撃を与えると、小鳥のさえずりに似た音を出すのだ。「バネに触ると作りものの鼻が動いて岩のてっぺんに姿を見せる。すると小鳥が静かになる。鼻だぞ、危ない、というわけだ。またべつのバネにさわると鼻が隠れて小鳥たちがまた啼きはじめる。好きなだけこれをくり返して遊べるのだ」。

こんな楽しい仕掛けが我々の庭にあったなら、夏の一日をクーラーのきいた部屋に閉じこもって過ごす法はありません。

イタリアには他にも、ローマ近郊にあるアルドブランディーニ荘のように、噴水を「劇場」にまでしている庭園があります。

水は丘の頂上から滝のように流れ落ちて、大きな円形劇場のような建物の内部に注ぎ込む。この建物の内部には、中央に水音高い噴水槽があり、左右にアーチ形の洞窟がたくさん並んでいて洞窟のなかには珍奇な岩や、水力オルガンや、水力で鳴いたり飛びまわったりする鳥や、その他のいろいろな水力仕掛けの見世物がある。

(ヨーロッパの乳房 澁澤龍彦著)

羊水の静寂と原始の水の喧噪。人が水にどう対しようとも、水の与えてくれる力の根源は決してかわることがないでしょう。

霧に煙る那智の瀧

無隣庵庭園 中央奥に滝がみえる

鼻の自動人形のある噴水装置 (アルドブランディーニ荘の噴水劇場) May Woods “VISIONS OF ARCADIA” Aurum Press より

©ごろくと工房